

# 亡き人と共に

又、今年もお盆の季節がやつてまいりました。毎年のことながら、家族そろつて、お墓参りなど、ご先祖を偲ぶ日本人の美しい習慣のかもしませんね。近頃はさつさとお盆参りをさせて、後はゆっくりと遊び歩くようなこともよく行われているようですが・・・

そこには、亡き人はいません。それどころか亡き人との関係を断ち切るようなことを平気でされる方も数多くおられます。死者を忌まわしいもの、不吉なものとして排除しようというのです。塩をまいり、故人の茶わんを割つたり、屏風を逆さにしたり、普段とは逆のことをしようと、とか淨、不淨とかで語るものではありません。死は自然の摂理として受け止めなくていいべきなのです。私たちの迷いとは、その摂理を素直に受け止められないところから、来ているのです。一九二一年イギリスの豪華客船タイタニック号は処女航海の途中氷山に激突して千五百人の死者をだす史上最大の海難事故を起こしました。映画でも、小説でも、悲劇のドラマとして語り継がれています。NHKで数年前に放映された「タイタニック号は人間ドラマ」では次のように語られています。『タイタニック号は深夜に突然氷山に激突して大きな爆発と共に沈没した。その時に救命ボートには子供や、女性を優先して乗せた。救命ボートは助けられるまでその場に居合わせた。そのためにボートに乗っている人々は船と共に沈んでいく夫や父親の苦しみながら死んでいく声をなすすべもなく聞き続けなければならなかつた。引き上げられた遺体の検死結果によれば死因は凍死か、窒息死だつた。窒息と言つても溺死ではない、寒いために喉だけで呼吸しようとしたからだつた。船から飛び降りて泳いでボートに乗つた人々も殆どが寒さのために凍え死んでしまつた。夜明けと共にカルパチア号に救助されようやくその場を離れることが出来た。しかし苦しみながら死んでいた夫や父親のうめき声は生涯忘れることがなかつた。自分が助かつた事、夫や父親を助ける事が出来なかつた罪悪感は、生涯助かつた人たちを苦しめることになつたのである。』そうしてこの番組では最後に次のようにまとめていきます。「亡くなつた人たちを語り継いでいくことは、亡くなつた人たちに敬意をはらうことである」過去を、いや亡くなつた人を忘れずに生きることが過去の苦しみを和らげ現在を生きる力につながつていいということです。死者を葬るとか、忘れるのではなく「死者とともに生きる」ことを学ぶことが、今の私の生きる原動力にはなつてはきませんでしょうか。私が今生きている事がどれだけの「死」の犠牲の上に成立しているか、いや生きていることは罪を造り続けているということ、その事を知つていても、知らぬふりをしてごまかし続けている私。亡き人と語つてみませんか。亡き人と歌つてみませんか。平生忙がしいと言い訳し、忘れ去られている亡き人の声に今年のお盆はそつと耳を傾けてみませんか。